

山林修行と唯識く徳一たちの実践く

令和七年五月二十四日(土)

磐梯山慧日寺資料館歴史講座

兼師寺 本坊主事
唯識学 寮研究員

高次 喜勝

但し煩惱を断伏するは、必ず定と慧、相資くること車の二輪の如し。一つを闕いて至るべからず。(玄奘「請入嵩岳表」)

(煩惱を断ち調伏するためには必ず禅定と智慧が助けあうことが必要である。それは車が二輪ですすむようである。どちらを欠いても悟りには至らない)

徳一と山林修行をつなぐ言葉

■空海からみた「徳一」という人(『高野雑筆集』より)

□空海の書簡(弘仁6年815年)「陸州徳一菩薩」宛

空海が東国の有力者に対して自身が持ち帰った密教經典の書写を依頼する書簡のひとつ。同様の書簡(文面は異なる)は徳一のほか「下野国広智禅師」「某阿闍梨」「万徳菩薩」「甲斐国守藤原真川」「常陸国守藤原福当麻呂」など、少なくとも11名に送っている。

聞くならく徳一菩薩は戒珠は氷玉の如く智海は泓澄たり。斗藪して京を離れ、錫を振るいて東往す。始めて法幢を建て衆生の耳目を開示し、大いに法螺を吹きて萬類の仏種を発暉せしむ…ああ、伽梵の慈月は水にあれば影を現し、薩埵の同事何れの趣にか到らざらんや。…陸州徳一菩薩法前(空海『高野雑筆集』巻上)

(伝え聞く所によれば、徳一菩薩、あなたは戒律を守ることは恰も氷玉のように清らかで、智慧は海のように満ちあふれている人物とうかがっております。塵勞(煩惱)をはらって都を離れて、教化の錫杖を振るって東におもむかれました。かの地において、はじめて仏法の旗をたなびかせ衆生の耳目をひらかせ、法螺貝を吹くが如く大いに説法し多くの人びとの仏の種子を奮い起こされました。それは水面に如来の慈悲の月影が映るように、菩薩が衆生とともに歩まれること六趣にいたらないところないようです。…陸州徳一菩薩御前)

- ①戒律を守り、智慧がすぐれた人物だと「聞いている(聞くならく)」「↑面識はない
- ②斗藪(抖擻)して奈良を離れて東国に趣いた人である
- ③「始めて」「東国に仏教を伝え、人びとの「仏種(仏の種子)」を呼び起こす」寺院の草創
- ④その功績は、如来の化身のようであり、また菩薩の行いである。「徳一菩薩」という呼称

山林修行と斗藪(抖擻)

■修行してどうなりたいの? 仏教が目指すところとは…

■菩薩の6つの修行 六波羅蜜 布施・持戒・忍辱・精進・禅定(静慮)・智慧波羅蜜

□斗藪（抖擻）とはなにか？

頭陀 梵語に杜多トウダといい、漢には抖擻トウサツというなり。謂く三毒は塵ちりの如く、よく真心を塗汚す。この人、よく振掉ふるつて除去す。故に今訛りて頭陀と称するなり。（宋・道誠『釈子要覽』）
（梵語では杜多といい、漢語では抖擻という。貪・瞋・痴の三毒は塵のように真心を塗り汚す。これを振り払って除去することを抖擻という。今は訛って頭陀という）

飲食・衣服・住居についての貪りを除去して「口を浄める・抖擻」は「ふるう」の意味。

□『瑜伽師地論』に説くところの十二・十三の杜多（頭陀）行

いかんが杜多の功徳を成就すというや。

謂く①常に乞食こつじきを期し、②次第に乞食し③但一坐の食とし④先ず止して後に食するなり。

⑤但だ三衣を持ち、⑥但だ毳衣さいえを持ち、⑦糞掃衣ふんそうえを持つ。⑧阿練若あれんにやに住し⑨常に樹下に居

す、⑩常に迴露こころとして居し、⑪常に塚間ちゅうかんに住するなり。⑫常に端坐たんざを期し、⑬処する

ころ常坐の如きなり。かくの如く依止せば、若しは食、若しは衣、若しは諸敷具において

杜多の功徳あらん。（『瑜伽師地論』巻25）

食事に關するもの ※乞食2種をひとつとして、十二杜多行とすることが多い

①常期乞食…生きる食事をすべて乞食に期すること

②次第乞食…貧富を選ばず順に家々を乞食してまわり、食事を受ける

③但一坐食…一坐のみの食事を残さず受け、重ねて食事を摂ることがないよう

④先止後食…まず正しく了知（理解）し、その上で食事をとること

衣服に關するもの

⑤但持三衣…三種の衣服（衆聚時衣・上被衣・內衣）のみを持つこと

⑥但持毳衣…毛毳（鳥獸の毛）で作られた防寒着のみを用いること

⑦持糞掃衣…街や道端に捨てられた不浄の布を洗い、縫い合わせた糞雜衣のみ用いること

住処に關するもの

⑧住阿練若…阿練若（人の声・薪採り・争いごとのない場所・空閑処）に住すること

①静かな森林「空閑なる山林・垆野とらや（荒野）」

②街村を離れた（離れすぎない）場所「村を一俱盧舍、六百余歩離れる。」およそ1km

③僧侶が修行する場所…いわゆる寺院

⑨常居樹下…住居に対する貪りを除くため、常に樹木の根元に居住すること

⑩常居迴露…常にさえぎるものがない露地で居住すること

⑪常住塚間…常に塚間（墓地）に居住すること

⑫常期端坐…常に牀座・繩牀・荷葉坐などに坐して、樹木や壁にもたれかからない

⑬処如常坐…ひとたび坐したら、修理せず、横にならず端座して修行すること

大事なのは住阿練若・常居樹下・常居迴露 ↑ 街区から離れた寺院と山林修行

■阿練若に住してなにを求めめるのか？

彼たに阿練若の如く、塚間に坐し、乞食して山林閑静にして欲を捨てて定に入らん。(『別訳雑阿含経』巻1)

- ①墓地に住んだり、乞食したり、山林に籠もったり
 - ②欲を捨てる
 - ③禪定に入る
- 又自身、山林の中に在って、善法を修習し、諸実相を証して、深く禪定に入りて、十方仏に見えるを見ん。(『妙法蓮華経』巻5、安樂行品)
- ①山林に入り
 - ②教えを習い
 - ③悟りを証して
 - ④深く禪定に入り
 - ⑤諸仏にまみえる
- 山林に籠もることで
- ①世俗をはなれ
 - ②禪定に入り
 - ③悟り・諸仏にみまえる
- 禪定(静慮)波羅蜜 ↓ 智慧波羅蜜への起点 修行により智慧を得る

山林修行と法相宗の祖師たち

■玄奘三蔵(602-664)と山林修行 「禪」「禪定」「静慮」

645年、インドから帰国した玄奘三蔵に、太宗は還俗や高句麗への同行を薦める。

玄奘はこれを断り、菩提流支三蔵がいた嵩岳少林寺での翻訳を望む。太宗はこれを許さず、長安弘福寺を与える。

657年9月、再度高山少林寺に移りたいと高宗に上表する。そのなかで禅観の重要性を述べる(『寺沙門玄奘上表記』「請入嵩岳表」) ↓ 高宗は許さず玉華宮に移る

□玄奘三蔵の嘆き

玄奘毎に惟んみるに、この身は衆縁仮合にして、念念無常なり。(略)しかるに歲月流るごとく、六十の年は颯焉として已に至る。ここに遄速なるを念うに、則ち生涯知るべし。(略)塗路は遐遙にして、身力は疲竭す。頃年已来、更に衰弱を増し、顧みて視景は陰る。能く復た幾何ならん。すでに資糧未だ充たさずして、前塗漸よ促る。これを以て傷嗟せざる日は無く、筆墨これを陳ぶるに尽くすこと能わざる也。

(我が身を振り返れば、儚い我が身で、いつ尽きるかわからない命。でも資糧「悟りへの糧」は、まだ足りないままに次の途「三途」に向かう。嘆かぬ日はなく、筆舌尽くしがたい。) ↓ 若き日のお釈迦様のような嘆きを感じる玄奘の思い。

人生の無常なることを覚悟した55才の玄奘三蔵

□のこりの人生の使い方

少欲知足はまた諸仏の誠誠なり。玄奘、自ら揆るに(略)望むらくは骸骨を乞いて命を山林に畢り、礼誦経行して以て提奨に答えん。

(諸仏は「少欲知足」を誠めるところである。望むらくは、私も山林で命を終え、礼誦経行に専念して諸仏のすすめに答えたい。) ↓ ひとつの目標として「少欲知足」 ↓ 抖擻の生活

□定(禪定)と慧(智慧)の両輪

但し煩惱を断伏するは、必ず定と慧、相資たすくこと車の二輪にの如し。一つを闕かいて至るべからず。経論を研味するが如きは慧学也。林に冥やむらかに坐するに依るは定学也。玄奘少なきより来このかた頗すている教義を専精せんしゆするを得るも、唯し四禅九定のうえに未だ安心あんじん暇いとまあらず。(煩惱を断つためには禅定〔精神修養〕と智慧〔勉強〕が必要。お経を勉強するのは慧学〔智慧〕。山林に安らかに座して修行するのは定学〔禅定〕。私、玄奘は小さい頃から教義は勉強したが、四禅九定〔9段階の禅定〕はまだ確立できていない) ↓修行したい!させてくれ!

□禅定とはなにをするのか?

今願わくば慮おもを禅門ぜんもんに託たくみ、心を定水に澄まして、情じやう猿えんの逸躁いつそうを制し、意象いざうの奔馳ほんちするを繫つながん。若し迹あとを山中に斂おさめざれば、成就じゆうじゆすべからず。今承うくに、この州の崇高少室は(略)実に海内の名山、域中の神岳なり。その間にまた少林伽藍閑居寺等有り。(略)実に依帰して以て禅觀を脩しゆむべし。(略)心猿を守察し、実相を觀法せん。(略)仍こいねて冀ねがくば禅觀の余の時間には翻譯せんことを。

(願わくば、禅定に心を磨いて、落ち着きのない情猿〔猿のような心〕や、走り出すと止まらない意象〔暴れる象のような心〕を修練したい。これは山中で修練しなければ成就しない。天下の名山嵩岳には少林寺がある。ここで禅定の觀法を行って、心の猿をとりひしぎ、実相を觀察したいのです。こいねがわくば、禅觀の余暇の時間で、翻譯をさせてください)

↓禅定の目的は「情猿の逸躁を制し、意象の奔馳するを繫つなぐこと。それは山中でこそ可能。↓心猿〔内的な欲望〕と実相〔外的構成要素の無相・無常なる様子〕を觀察すること

玄奘三蔵は山林(嵩岳)に籠もって、禅觀(禅定生活)による精神修養がしたかった。

「禅定」…禅はディヤーナの音写。定はディヤーナの意識で、心が定まって動かない様子をいう。玄奘は「静慮じやうりょ」と訳し、その境地(三摩地さんまじ)を「心一境性(心がひとつの対象に衆中している状態)」としている。

■禅と玄奘―日本人僧道昭に禅をすすめる―

□道昭(629-700)

飛鳥時代の法相宗の学僧。河内国丹比郡の生れ。俗姓は船連ふなのむらじ。653年(白雉4)入唐学問僧として遣唐使にしたいが唐にわたる。玄奘を師として業をうけた。玄奘からとくに愛され、同房に住み、禅を習い、悟るところが多かった。661年(斉明7)帰朝にあたり、玄奘所持の舍利・経論を授けられ、翌年、飛鳥の法興寺の南東隅に禅院を建て、天下の僧徒に禅を教えた。のち、各地を周遊して、路傍に井をうがち、津のわたりに船をもうけ、橋を造った。

(玄奘三蔵)「経論は深妙にして究竟くきやうすること能わず。禅を学び東土あづまに流伝りゅうでんするに如しかず」と。和尚教えを奉り、始めて禅定を習う。悟るところ稍ややも多し。(『続日本紀』道昭卒伝)

↓經典や論疏は難しいので究めがたい。だから「禅」を日本に伝えなさい…「禅」とは?

「悟るところ稍も多し」実践でお経がわかるようになった

□道昭は法興寺（飛鳥寺）に禅院を建てて一禅の道場―

還つて本朝に帰り、元興寺東南の隅に、別に禅院を建てて住まう。時に天下の行業の徒は、和尚に従い禅を学ぶ。（『統紀』道昭卒伝）

□道昭と山―『日本靈異記』―役優婆塞（役行者）と道昭出会う。

『日本靈異記』には役優婆塞（役行者）と道昭が新羅の山中で出会う話が出てくる

わが聖朝みかどの人、道照法師、勅を奉じて法を求めんとして大唐に往きき、法師、五百の虎の請いを受けて、新羅に至り、その山中に有りて法華経を講じき。時に虎衆のなかに人有り。倭語を以て問を挙げたり。法師「誰ぞ」と問うに、役優婆塞えんのうばそくなりき。法師「我が国の聖人ひしりなり」と思いて高座より下りて求むるに無し。（『日本靈異記』卷上28縁）

■行基菩薩 若き日の山林修行と「弱」山林寺院

若き日の行基は山林修行を重ねたことが伝記に登場する。低めの山林寺院を多く建立している

■法相宗と山林修行 護命僧正の例

護命（750―834）は美濃国各務郡の出身。元興寺万耀・勝虞に師事して法相唯識を学び、大僧都、僧正を歴任する。最澄の比叡山大乗戒壇設置については南都仏教を代表して異を唱えた。空海は護命の80歳の祝いに漢詩をおくっている。

（護命僧正は）年十五にして元興寺万耀大法師を以て依止えじとなし、吉野山に入りて苦行す。十七にして得度し、すなわち同寺の勝虞大僧都に就きて法相大乘を学習する也。月の上半は深山に入りて、虚空蔵法を修し、下の半は本寺に在す。（『続日本後紀』卷三・承和元年（834）9月11日条）

↓護命は、吉野山に籠もつて修行。1ヶ月の前半は山林で虚空蔵菩薩くもんじほうの求聞持法ぐもんぢほうを行い、後半は本寺（元興寺？）で生活をしていった。

■徳一と禅定 いわき市入遠野 入定処（一説にはお墓といわれるが、修行場では？）

筑波山禅定（禅定窟） 筑波山には今も禅定講がある。これは徳一とくいちのなごりでは…

■「自然智を宗とする」人びとはいたのか？

□短翮者（徳一）の師資相承について

若しは短翮たんかくしや（徳一）、師説を稟りやうけるならば、未だ師師の日本に伝うを知らず。

若しは道昭および智通ちつうと言わば、古記の中にその文を示せ。

若しは古徳の所伝の語といわば、後の学者を信ぜしむるに足らず。

若しは比蘇ひそ（神叡じんゑい）および義淵ぎえんと言わば、自然智の宗は稟りやうくるところなし。短翮たんかく、何ぞ稟りやうくること有りと言うや。

短翮、若し自ら悟る所と言わば、早く速かにこの邪見を捨離せよ。寧んぞ名利のために聖釈を破る也。（『法華秀句が』卷上末）

(もし短翮者(徳一)が、師匠の説を受けたというならば、私は誰が師資相承して日本に伝えたかは聞いたことがない。

もしも道昭や智通が(唐から)伝えた説だというならば、その記述を示せ。

もしも彼ら(入唐僧)じゃない説ならば、後世の学者が信用するには足りない。

もしも比蘇寺神叡や義淵の説というならば、彼らは自然智を宗とするので、誰かから受けたわけではない。どうして徳一は「教えを受けた」というのだろうか。

もしも短翮者(徳一)が自ら悟った説だというなら、邪見はすみやかに捨てなさい。どうして名利のために聖教(経典)にそむくのか)

道昭(629-700)：玄奘三蔵の直弟子。653年に入唐。

智通：658年に智達とともに入唐。玄奘三蔵に師事し「無性衆生義」を伝えたという。

比蘇寺神叡(?-737)：飛鳥寺僧、義淵の弟子か。吉野比蘇寺に隠棲し自然智を得た。

義淵(643-728)：飛鳥寺で学び、飛鳥・吉野に寺院を建立。

自然智：自然に得た智慧。山林抖擻などの修行体験のなかで悟りえた智慧。

① 印度・唐・日本(畿内)の延長線上にある東国会津

② 法相宗の学僧徳一と対峙する最澄

③ 徳一は誰の弟子なのか、当時の畿内でもよくわからなかった。(そもそも)

■ 自然智とはなにか？

もし衆生ありて、仏世尊の法を聞き信受するによって、勤めて精進を修め、一切智、仏智、

自然智、無師智、如来の知見と力、無所畏を求め、愍念して無量の衆生を安樂し、天人を

利益し、一切を度脱す、これを大乘と名づく。菩薩この乗を求むるが故に、名づけて摩訶

薩となす。(『法華経』譬喩品)

↓如来の説法をきいて修行し、①一切智 ②仏智 ③自然智 ④無師智 と如来の知見と力

と恐怖させない功德を求め、一切衆生を救おうとする人が大乘であり、菩薩はこれを求める。

↓自然智はどうやら菩薩が求める智慧のひとつで、仏智の次のあたり。

「自然智宗」が特別な宗派とする研究者もあるが、そんなものない：自然智・無師智だから。

自然智を得たと伝わっている僧侶たち

比蘇寺神叡(飛鳥時代・『扶桑略記』延暦僧録逸文) 舍利尼(『日本靈異記』 富貴寺道詮(平

安前期『僧綱補任』) 覚鑠(平安後期『太平記』)

□ 自然智は継承されるものではないので宗派として認識することは矛盾がありすぎる

唯識の実践―止と観をすること―

■ 徳一たちが山林や阿練若で行っていた修行とは何か？

最澄『守護国界章』巻上之下に徳一『中辺義鏡』の逸文が引用されている。

「謗法者大小交雜の止観を弾ずる章第十三」(『止観論』)

謗法者(徳一)が大乗・小乗ごちゃまぜにして止観を語っている点を糾弾する!

『止観論』は『解深密経』・『瑜伽師地論』などのテキストの引用で大きく構成されている。

↓徳一ならではの独自性は少ない: インド直輸入の法相宗ならでは。

(余談ですが…) 中国でできあがった天台とインドで大成した唯識(法相)の違い

■徳一のめざすところ「唯識」とは?

□「ただ識のみ」↓ただ私の心のイメージのみしかない ただ私の認識だけ

□瑜伽行唯識学派⇨ヨーガの実践を中心とした瞑想の中で発展した仏教⇨本来実践主義

「唯識無境」「万法唯識」「心外無別法」「三界唯心」

諸の識の縁する所は、唯だ識の所現なり。(『解深密経』)

(識の認識対象となる世界は、ただ識の現れである)

※「世界」(時間と空間)というけれど: 認識の上でのみ存在するものではないか。

先ず一切の諸法はみな我心を離れず。大海・江河・須弥・鉄围(山)、見ず知らぬ他方世界、

浄土菩提、乃至一実真如の妙理まで、皆ながら我心の内にあり。何をか況んや、我身の頭

目・手足・衣服・飲食等をや。(良遍『法相二卷鈔』)

■菩薩の修行は「止観」「止」と「観」の実践をすすめる

もしくは利根の者、自ら教法に依って思量し、止観のうえに修する。これを随法行の菩薩

と名づく。もしくは鈍根の者、経教によらずして、直に禪師等の教授を信じ、止観のうえ

に修する。これを随信行の菩薩と名づく。(『守護国界章』卷上之下・徳一「止観論」)

(もし優れた素質の者あれば、自ら教えによって考えて止観を修習する。これを随法行・教

えに随って修行する菩薩という。もし劣った素質の者あれば、経のみによらず、直接禪師な

どの教授を信じて止観を修習する。これを随信行・信によって修行する菩薩という)

■止(集中)と観(観察)の関係性

善く思惟する法に於いて、独り空閑に処し、作意し思惟す。(略)よく思惟する心は内心に

相続し、作意し思惟す。かくの如き正行に安住多きが故に、身の軽安および心の軽安を

起こす。これを奢摩他と名づく。かくの如く菩薩はよく奢摩他を求む。彼は身心軽安を獲

得するにより、所依とするが故に、即ち、かくの如く善く思惟する法(止・奢摩他)、内

の三摩地の所行の影像のうえに、心相を観察し勝解し捨離する。よく正しく思惟し、最も

極めて思惟し、周遍を尋思し、周遍を伺察す、これを毘鉢舍那と名づく。かくの如く菩薩

は、能く善く毘鉢舍那をなす。(『解深密経』卷3)

①「止」奢摩他・シャマタ: 表層・深層の心が静める心の働き。ひとり静かな環境で心を静めることをつとめて、心を一境に集中する。瑜伽(ヨーガ)の要素のひとつ。心を寂靜にして、一境專注すること。 止⇨三摩地(三昧)⇨静慮⇨禅定(定)

↓作意・思惟は自分で積極的に心を静めるために働かせること。

②「観」毘鉢舍那・ヴィパッサナー…止（奢摩他）によって静かになった心に、よく影像（イメージ）を浮かべて、真実の有り様を思忖（とりしらべ）・尋思（おもんばかり）・伺察（見すえ）・観察する。

■徳一の考え方

地前の菩薩はまた真如を観ずることを学び、唯識を観ずることを学び、三性と三無性等を観ずるを学ぶ。未だ歎ずべからずと雖も、まさに懈廢すべからず。（徳一「止観論」）
（高位でない菩薩たちは真理を観察することを学び、唯識「ただ私の心の働きしかないのだ」と観察することを学び、三性と三無性とを学ばねばならない。いまだ讚歎されるほどでないとしても、退廃したり、サボってはならない）

三性説―虚妄分別する私の心―

人間ならば誰にでも、現実の全てが見えるわけではない。

多くの場合は、見たいと欲する現実しか見ていない。（ユリウス・カエサル『ガリア戦記』）

□三性について みんな間違っている見解を持っている

①遍計所執性…因縁所生の現象（依他起性）なのに、変化しない実体・実我があると誤認する性。遍計とは周遍くものに計度して、虚妄分別するの意。自分の経験や認識により左右されたモノの見方

②依他起性…「他（縁）に依って起こる性」の意。因縁・縁起のなかで生まれて滅していくもの（※空であって無ではない！）≡当たり前のことを当たり前に見る

③円成実性…「円かに完成された性」の意。真理の認識の姿であり、菩薩・如来の知見。

□良遍『法相二巻鈔』の説明 ③↓②↓①で読んだらわかりやすい…

③（円成実）性は即ち真如の妙理なり。…円満成就して本来凝然なるが故也。

②（有為の諸法を依他起性という）真如の上に他の縁により仮に起これる相なるがゆえなり。色声香味触法・眼耳鼻舌身の中の諸の心、および資具舎宅田園山林河海等これなり。

①この仮の相を仮の相とも悟らずして、定んで実には有りとと思う心の前に当たって、現する実有の面影を遍計所執と名づく。

□大事なのは遍計所執性から依他起性への転換（転依）―根本転回―

□唯識観の実践が山林抖擻

① 歩くことに專注し ② 身と心で外界を観察し ③ 虚妄分別する凡夫であることを再認識する

山林でも家でも会社でも自分にとっての「阿練若・空闲处」を持っておきましょう。

心を静めて集中し、観察するルーティンを作っておくと勝手気ままな心と付き合ひやすくなる。

山林抖擻・瞑想・お写経・座禅・お念仏。なんでもいいです。万法唯識ですから。

徳一のこと もっと知るための Q&A

◎写真は、様々な寺院が所蔵する「徳一大師坐像」です。
様々な表情を見比べてください。

どれくらい
わしのことを知って
おるかな？

Q.1 徳一はいつごろの 人なの？

A. 奈良時代のおわりから平安時代の
はじめごろの人だよ。天平二十(748)年ごろに
生まれたという説がある*1。貴族 藤原仲麻呂
(706~764)の息子だったなんて
伝説がうまれるくらい謎を
秘めた人物なんだよ。

観音寺(福島県本宮市)

妙光寺(福島県いわき市)

Q.2 徳一はどこで 勉強したのかな？

A. 東大寺や興福寺で修行したと伝えられているよ。
昔の目録には「東大寺徳一述」「東大寺得一」と
書いてあるよ*2。興福寺の修円(781~842)に
仏教を学んだという話もあるね。
最澄は「弱冠にして都を去り」東国に住んだ*3
といっているから、若くして奈良を
去ったんだろうね。

如法寺(福島県西会津町)

Q.4 最澄や空海とは どんな関係だったの？

A. 平安仏教のトップスター最澄とカリスマ空海。
最澄とは仏教の教えをめぐって「一三権実論争」を
行い、比叡山と会津の間で書物のやりとりをして
義論をたたかかせた。空海は徳一に手紙を送って
密教の經典の書写を頼んでいるけど、
徳一は『真言宗未決文』という本を書いて
真言宗の疑問を提議したんだ。

徳一大師入定所
(福島県いわき市)

Q.3 なぜ、菩薩って 呼ばれたの？

A. 弘仁六(815)年に空海が徳一に宛てて
送った書簡で、空海は徳一のことを「徳一菩薩」と
呼んでいる。徳一が造ったり、なおしたと伝わる
お寺は福島・茨城県を中心に190ヶ寺くらい
あるんだ*4。それこそ東国の人々に仏教を
伝えた「菩薩」といわれる所以だね。

相応寺(福島県大玉村)

Q.5 徳一はどこで なくなっただの？ お墓は？

A. 徳一がいつ、どこでなくなったかは
はっきりしない。でも、会津の恵日寺(福島県
磐梯町)には平安時代末期に建てられた
五重の石塔(徳一廟)がのこっているよ。
筑波山(茨城県つくば市)にも石塔が
あったという記録がある。また徳一の
入定処(福島県いわき市)と呼ばれる
土地があったりして、今でも信仰
されているんだ。

恵日寺(福島県磐梯町)
徳一廟五重石塔

Q.6 徳一と坂上田村麻呂 って友だち!?

A. 徳一の建てたお寺の多くが延暦年間から
大同年間(782~809)にできたという縁起を
伝えてるんだ。この時期に東国蝦夷の征伐
に都から派遣されたのが坂上田村麻呂。
二人には協力して布教を行った？
という伝説も…。

*1 歿年は承和年間説や、天長五(828)年説などがある。 *2 円起『華嚴宗章并因明録』・永超『東域伝灯録』
*3 最澄『守護国界章』「蘆食者弱冠ニシテ都ヲ去リ、久シク一隅ニ居ス。」とある。 *4 高次喜勝調べ。